

治四十四年、大正元年、大正二年、大正四年—大正十四年、昭和元年—昭和十年、昭和十三年)

ついで、戦後の甲府市統計書について調査・収集作業をおこなつたところ、確認されたものは、

「甲府市勢要覧」(昭和二十三年、昭和二十五年—昭和二十九年、昭和三十一年、昭和三十二年、昭和三十四年、昭和四十六年、昭和四十七年)、「甲府市統計要覧」(昭和四十八年、昭和四十九年)、「甲府市統計書」(昭和五十年、昭和五十一年、昭和五十三年、昭和五十四年、昭和五十七年—昭和五十九年、昭和六十一年—平成元年)

であり、戦後の甲府市の統計について実質上利用可能な統計書は昭和四十八年の「甲府市統計要覧」以降であることが判明する。

利用可能な甲府市統計書が、戦前期は明治末期から昭和十年まで、大きな障害に直面した。当初、「糊と鉄」でできることと想定されていた統計表の作成そのものに唯一の利用可能な労働力資源を投入する必要に迫られたからである。

そこで、編集方針を、学生・社会人を対象としたコンパクトで実用的な甲府市統計ハンドブックを作成することに切り替え、「国勢調査」、「工業統計」、「商業統計」、「家計調査」、「財政統計」など、甲府市にかかる基礎統計の収集・整理にほぼすべての作業をあてることにした。統計書の編纂ともなれば、各統計に関する解説のみならず、各統計に関する利用上の注意(調査方法、分類基準の変更など)、統計用語の説明などの必要性がでてくるものの、こ

れらの多くは断念せざるをえなかつた。また、農業統計では「山梨県農林業累年市町村別統計」、工業統計では「工業統計調査結果報告」、商業統計では「山梨県商業統計調査結果報告」を資料として利用するなど作業の効率性から資料の選択がおこなわれたものもある(「工業統計」と「工業統計調査結果報告」との間で実用上大差がないとも判断した)。

まつたく予期せざる航路に自身乗り出したものの上記の統計についてはほぼ可能なかぎり入手できたと思う。特に大正九年以來の「国勢調査」は、単に総人口の推移だけでなく年齢階級別人口の推移、就業者(有業者)の産業別構成の推移をも伝えており、戦前期の甲府市を語る上でも不可欠の貴重な情報を探してはいる。一方、作業の遅れから消費者物価統計の多くが収録されなかつた。運び込んだ荷の値踏みは市場に委ねるとして今はただ航海を終えた解放感に浸りたい。

(市史編さんを終えて)

専門委員 山本多佳子

私は市史編纂事業に一九八六年から七年間携わつたことになる。その間、通史編二巻と史料編三巻にダイジエスト版を出したので、いつも市史の原稿締切に追いかけられているような感じであつた。限られた時間と、これまた十分とは言えない私の能力ギリギリのところで私なりに頑張つたつもりだが、振返つて心残りの点もないとはしない。執筆者としては、関係者の聞き取り調査や、無駄も出来る余裕ある史料調査も行つて奥行のある市史にしたかったと思つてい

るのだが、結局のところ、常に態勢作りが遅れ、その分、大変しんどい、心残りの多い「見切発車」的な執筆作業の強行となってしまつたようと思う。必要なのはラストスパートではなくスタートダッシュであった。

次に史料について気がついたこと。市役所は戦災に遭っているので戦前の史料については諦めていたが、戦後の史料も保存状態が悪いのに驚いた。市役所の文書は保存年限が決められており、それが過ぎると思い切りよく捨てられているようで、市の執行した様々な事業の殆どについて、その過程を物語る文書は捨てられて、決定書のようなものしか残っていないかった。言うまでもなく、大切なのは結果より、そこに至るプロセスである。手狭な庁舎であることは百も承知であるが、将来のことを考えて画一的な文書保存方法を変更し、「市の行つた仕事をしてはしつかりと資料を保存してゆく」ようにして戴けないものだろうか。史料編にアメリカの公文書館に保存されているGHQ文書を収録したが、彼の国では占領地の、しかも小さな山梨県の軍政部の残した文書まできちんと保管しているのだから、これは、単に建物の広狭の差ではなく、自治・行政に対する責任感の大きさと想い入れの深さなのだと思うが、どうだろう。

また市民の皆さんが現在、発行されている会報やチラシ、書き続けられている日誌など、数十年たてば貴重な史料としての価値を持つ個人の家で保存するのが大変ならば、捨てる前に図書館等への寄託を是非ともお願いしたいと思う。

個人的には市史編纂事業のなかで、私は非常に多くのことを学ぶことができ、大変感謝している。その点では、とても楽しい有意義な七年間であった。これは偏に、ご協力を戴いた市民の皆さん、事

務局の皆さんのお陰である。この場を借りて、深くお礼申し上げる。更に、個人的感想を申し上げることを許して戴ければ、約百年間の甲府市の歴史を顧みて、何という変り方！多くの人が伝染病で死んだり、貧困に苦しむ状況から今日の繁栄を築き上げたことは素晴らしいことだが、同時に高度成長期以降の我々の物質的に贅沢な生活ぶりは地球上未曾有の決して許されない生存のスタイルなどいうことを痛感した次第である。

「甲府市史研究」終刊に寄せて

専門委員 植 松 光 宏

「市史研究」がいよいよ第十一巻目の最終号を迎えることとなりました。十年目の節目とでも申しましょうか、全十六巻の「甲府市史」が完結したので、それに伴い終刊となつたわけですから大変お目出たい訳ですが、一抹の寂しさを感じます。「市史研究」にはいろいろな思い出があります。一、二を思い出ししながら紹介させていただきます。

創刊号は昭和五十九年十月に発刊されました。市史編さん担当の高木伸也さんにお声をかけられ編集小委員に仲間入りさせていただきました。メンバーは斎藤典男、斎藤康彦、秋山敬、萩原三雄の各委員に私を加えて五人。それに事務局から高木伸也、数野雅彦、斎藤紳悟さん。創刊号発刊に対する期待は大きく、委員も事務局員も大変張り切り、幾晩も夜遅くまで意見交換をしあつたことが、つい昨日の事のようになぞらえて想い出されます。苦労のしがいあって創刊号は評判も上々、今もあの時の感激は忘れられません。